

琉球大学学術リポジトリ

琉球列島における環境・生活・交流の歴史的相互関係 — 考古学地域調査方法の再構築 —

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 公開日: 2022-04-13 キーワード (Ja): 琉球列島, 環境・生活・交流の歴史的相互関係, 考古学地域調査方法, 地中レーダー探査 キーワード (En): 作成者: 後藤, 雅彦, 主税, 英徳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017902

[報 告]

**琉球列島における環境・生活・交流の歴史的相互関係
—考古学地域調査方法の再構築—**

後藤 雅彦 ・ 主税 英徳
(琉球大学国際地域創造学部)

**Historical Interrelationships among Environment, Life, and Interaction in the
Ryukyu Islands : Reconstruction of archaeological regional survey methods**

Masahiko GOTO ・ Hidenori CHIKARA
(Faculty of Global and Regional Studies, University of the Ryukyus)

要 旨

本報告は、令和3年度琉球大学 科研費等獲得インセンティブ経費の交付をうけ実施した「東アジアの中の琉球列島—環境・生活・交流の歴史的相互関係を捉える」に関して、考古学における地域調査の方法を検討するために、具体的な実践例を紹介する。

キーワード：琉球列島、環境・生活・交流の歴史的相互関係、考古学地域調査方法、
地中レーダー探査

はじめに

筆者らは令和3年度 科研費等獲得インセンティブ経費の交付をうけ、「東アジアの中の琉球列島—環境・生活・交流の歴史的相互関係を捉える」を実施している⁽¹⁾。

琉球列島の島々における生業活動と生活のあり様（以下、「生活誌」として捉える）は、地域における環境と生活文化の関係、あるいは島内外の文化交流が凝縮されたものである⁽²⁾。

本稿は、こうした環境・生活・交流の歴史的相互関係が凝縮した島々の生活誌について、考古学的に検証するための考古学地域調査方法について、具体的な事例をあげながら検討する。

1. 環境・生活・交流の歴史的相互関係

筆者のうち後藤は、琉球列島と台湾に加えて中国大陸側の福建、広東を中心とした東南中国を含めた沿海地域を「東アジア亜熱帯沿海地域」（「東アジア南方沿海地域」）⁽³⁾と呼び、地域間の比較研究を行っている（後藤 2015・2017）。

東アジア南方沿海地域の新石器文化にみる「ゆるやかな変化」に示される継続性は、恵まれた環境に即した生活文化が長期的に維持されていたと考えることができる。一方、島という環境の中では断続的な人々の居住のあり方も想定できる。言わば、前者が長期的な視点、後者が短期的な視点から捉えられる島の歴史となる。

すなわち、「島」という「環境」の中で、いかに「生活」が営まれていたか、そして、周辺地域との「交流」が当該地域の「生活」にいかに関与を与えたか、その相互関係を長期的・短期的に捉えていくことが「島」の歴史・文化を捉える上で重要であると考えられる。

そして、環境の中で生活を捉えるためには、地域を設定して、旧地形の復元をふまえて、通時的な遺跡立地の変化を追求することが第一歩となる。

本研究は、環境・生活・交流の相互関係を軸とするが、台湾の考古学研究の中で、地域・区域を重視した自然と文化史に関わる総合的な研究プロジェクトが実施されている点は、先駆的な実践例として参考になるであろう。1970年代、張光直氏らが「台湾省獨水大肚兩河流域自然與文化史料際研究計画」を実施した。考古学、民族学を主とし、自然史分野の地質学、地形学、動物学、植物学（当初の計画では、これに土壌学が含まれていたが、専門家の参加がなかった）、合わせて6分野で構成されていた（張 1999）。

2. 考古学と地域調査

琉球列島において、農耕が定着するグスク時代（11世紀）までの先史文化では、長らく生業活動として採集・狩猟・漁撈活動が主たる位置を占め、緩やかな変化を維持しながら、グスク時代になると対外的な交流が活発化する中、農耕社会の形成を進み、急激な変化を示すようになり、琉球王国時代を迎える。

こうした緩やかな変化から急激な変化が地形選択・土地利用の変遷の中でどのように反映されているのだろうか。

沖縄には各時代の遺跡が約4000カ所知られている。それらの遺跡は、過去人類の活動痕跡を示すものであり、時代や人間の活動によって、遺跡立地にみる地形選択は異なると考えられる。一般的に沖縄諸島の遺跡立地として、洞穴遺跡の多い旧石器時代、縄文時代は早期の海岸砂丘地から内陸へ展開し、弥生時代併行期以降、再びリーフに面した砂丘地、12世紀前後には丘陵頂上にグスクが作られるという地形選択の傾向が示されている。

遺跡の位置の変化については、「生業の変化に対応」「生業のあり方に由来」「暮らし方の変化に対応」「社会の変化に対応」するものか、様々な視点からの検討が必要である（藤本 2000）。

遺跡に関する歴史情報の分析は、遺跡を構成する遺物、遺構の分析によって、遺物や遺構をもつ視覚的な特徴の抽出を行うと同時にそれらの位置関係の把握が重要となる。

この位置関係については、個々の遺物の出土地点や遺構の分布から積みあげて行く遺跡内の情報（出土状況）と、一地域の地理的な單元の中での遺跡間の関係という位置関係という双方向の分析が求められる（藤本 2000）。

とくに後者については、遺跡踏査（分布調査）—測量調査—遺跡探査—発掘調査を効率的に行う「考古学地域調査法」の再構築（第1図）を図り、地形復元にあたって、自然地理学者と連携し、考古遺跡の旧地形復元と地形選択の要因を明らかにする必要がある。

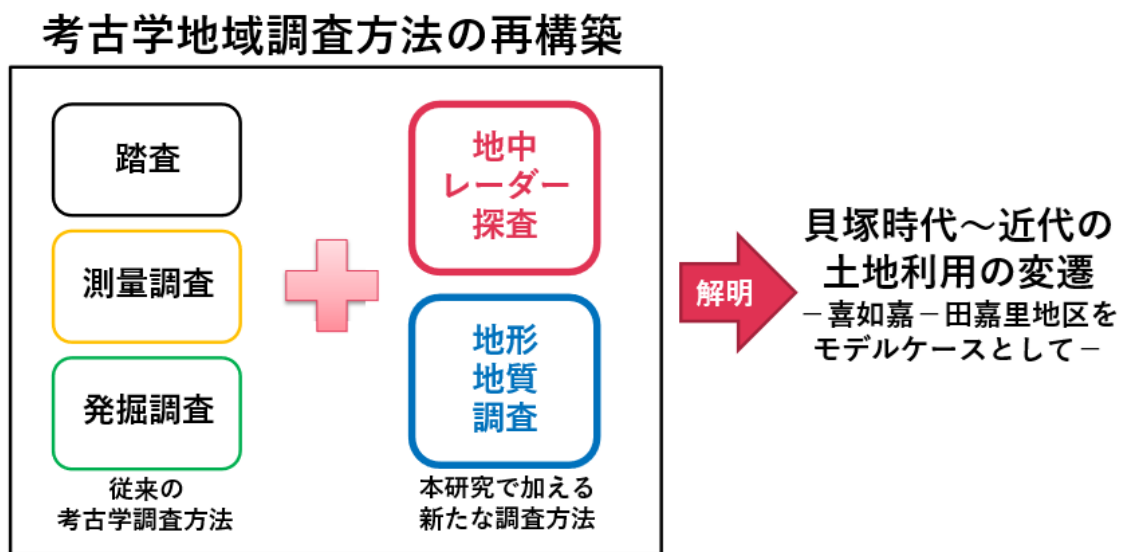
小野正敏氏（1995）が指摘するように、遺跡を「同じ土地の上を現在まで経時的にみつめ、その時々人の営みが多層・重層的に残された、時系列をもった三次元的な座標空間」として認識することが重要である。グスクの地形測量を例にしても地形と構築物との関わり、城跡におけるその後の土地利用などを表面観察によって如何に記録化するかという方法の検討が必要になると考える。

中でも、遺跡探査（地中レーダー）の導入を含む考古学地域調査法の再構築を図り、貝塚時代

の遺跡から近代までの考古遺跡の分布状況を捉え、考古遺跡の旧地形復元と地形選択の要因を明らかにする点が重要である。

すなわち、地域内の遺跡の分析によって、空間的位置関係の把握が重要であり、当面の課題としては、地形測量図、遺構実測図などの基礎資料の蓄積が急務であり、一地域内での考古遺跡の分布状況を把握する考古学地域調査法の再構築が必要である。

こうした地域内での各遺跡を対象として、その遺跡の立地する旧地形や堆積状況を把握することによって、地域内の長期的な土地利用の変遷を捉えることができると考える。



第1図 考古学地域調査方法の概念図

3. 考古学地域調査方法の実践に向けて

現在、筆者らは考古学地域調査方法の実践に向けて、具体的な地域をとりあげ、研究計画を練っているところである。

まず、沖縄本島北部では、下記のような範囲を喜如嘉－田嘉里地区と設定し、一地域内の遺跡の立地と堆積状況から地形復元により、地形選択の時間的変遷を捉える（第1表・第2図）。

第1表 本研究に関わる時期ごとの遺跡の種別

先史時代（貝塚時代）	グスク時代	琉球王国時代	近世・近代
遺跡（集落跡、遺物散布地）			
貝塚			
	グスク		
		窯跡	

喜如嘉一田嘉里地区で考古学的調査が実施されている遺跡には喜如嘉貝塚がある。同貝塚は1960年に発見、1978年に範囲確認の発掘調査、国道58号改修工事に係る緊急発掘調査が1992年11月～1993年2月まで実施されている。

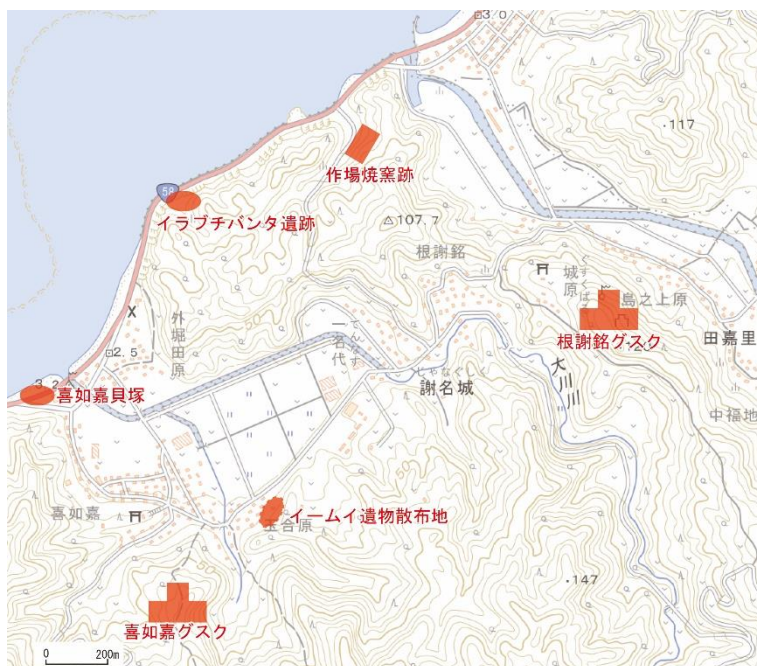
根謝銘グスクについては、1964年に表面調査と試掘調査が実施されて以来、近年、地元大宜味村で保存・活用のための調査が進展しており、琉球大学考古学研究室も2010年度より、大宜味村と協力し、根謝銘グスクの範囲確認のための測量調査（遺跡探査）を実施している（写真1）⁽⁴⁾。2016年度より大宜味村に学芸員が配置され、大宜味村では同年より試掘を開始し、2017年度より文化庁の補助をうけ、遺構や遺物包含層の確認のための試掘調査を実施している。本研究においても、これまでの調査資料の再整理を行った。

その他の遺跡については詳細な情報がないのが現状である。『大宜味村史』（1979年）によると、喜如嘉グスクはその性格は不明であり、「青磁片が散布していると伝え聞くが遺跡であるか確かめられていない」。

また、作場焼窯跡も「多くの研究者が現場を訪れ調査しているが、窯跡は発見されていない」という状況である。

このように喜如嘉一田嘉里地区には先史時代の貝塚から、集落跡と想定される遺跡・遺物散布地が分布し、グスク時代以降になると、グスク、窯跡などの遺跡が分布しており、異なる性格を持つ遺跡が時間的変遷の中で、地形選択を行われ立地している点は重要である。

当該地域を対象とした研究プロジェクトについて、2021年、科研費獲得を目指した⁽⁵⁾。



第2図 大宜味村喜如嘉一田嘉里地区 関連遺跡分布図
（電子地形図（国土地理院）を加工して作成）



写真1 2014年根謝銘グスクにおける地中レーダー探査



写真2 根謝銘グスクから喜如嘉を望む（2022年3月11日撮影）

もう一つが久米島兼城地区である。2021年末、文化財保護法第92条に基づいて発掘届を提出した。コロナ感染拡大によって、調査は延期になり、2022年3月13日～17日にかけて調査を実施することができたが、その報告については、後日改めて行うことにする。



写真3 2021年10月機上より撮影した久米島

久米島博物館の砂川暁洗氏によると、同地区は、考古学的調査が実施されておらず、考古学的にはほとんど把握されていないが、近世琉球の開始期に相当する1609年にできた集落であり、伝承や近世以降の記述によると、発掘調査を実施する地点は、伊敷索按司の蔵屋敷、近世段階では蔵元に近接し、兼城集落の根家の住居跡に近接する。



写真4 久米島兼城地区調査風景（2022年3月14日撮影）

また、2022年3月23日～25日、与論町与論城跡において遺跡探査と島内の遺跡踏査を実施した。前者の遺跡探査は、現在、与論町教育員会が実施している与論城跡の発掘調査に対応して、発掘調査の前に遺跡探査を行うものである。



写真4 与論城跡調査風景（2022年3月24日撮影）

おわりに—今後の課題—

本稿では、主に地域における考古学調査方法の再構築の試みについて、具体的な事例をあげて、検討した。調査方法として、当然、考古学独自の方法の有効性が問題であるが、さらに本研究のテーマである環境・生活・交流の歴史的相互関係を探究する上で、歴史学、民俗学などの隣接学問分野との協働をいかに取り込んでいくことができるか、多岐にわたる検討も求められる。

また、調査研究から、遺跡の保存・活用への展開、あるいは大学における歴史教育や文化財に

関わる人材養成⁽⁶⁾など、取り組むべき課題も多い。

謝辞

本研究の実践において、大宜味村教育委員会 寄合龍己氏、久米島博物館 砂川暁洗氏、与論町教育委員会 南勇輔氏には、計画の立案から実施まで、多方面にわたってご協力いただいている。

また、科研申請について、名古屋大学博物館 新美倫子氏、琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 廣瀬孝氏、羽田麻美氏、沖縄国際大学 宮城弘樹氏にご教示いただいた。

記して感謝の意を表したい。

註

- (1) インセンティブ経費での比較には、以下のテーマをあげている。
 - 1 東アジアにおける基層文化の形成と東アジア世界の共通性と地域性
 - 2 生活技術の交流にみる共通性と地域性
 - 2-1 稲作農耕と漁撈活動、および動物利用の変遷にみる共通性と地域性
 - 2-2 先史時代以来の土器製作から陶器製作技術にみる共通性と地域性
- (2) 島の「生活誌」という捉え方は、2021年度サントリー文化財団 研究助成「学問の未来を拓く」に「島の生活誌と東アジア人類史——弥生時代の琉球列島はなぜ稲作農耕を受け入れなかったか——」を申請した際に用いたものである。同研究は採択され、2021年8月より研究に着手している。
- (3) 当初、東アジア亜熱帯沿海地域と呼称していたが、最近では「東アジア南方沿海地域」と呼ぶようにしている（後藤 2021）。
- (4) 琉球大学による根謝銘グスクの調査については、主税英徳（2021）にまとめられている。
- (5) 令和4年度科研費基盤研究B「沖縄北部における環境・生活・交流の歴史的相互関係の探究」に申請したが、2022年2月末に不採択の通知があった。
- (6) 「令和3年度 地域志向活動トライアル経費による正課科目における地域志向取組」に、「地域における遺跡の保存と活用に関する現状把握と文化財関連人材養成に向けた取組」を申請したところ採択された。本取組については、本誌に別に報告している。

引用文献

- 小野正敏 1995 「中世の考古資料」『岩波講座 日本通史』別巻3、岩波書店
大宜味村史編集委員会 1979 『大宜味村史』
後藤雅彦 2015 「東アジア亜熱帯沿海地域の新石器文化にみる継続性と断続性」『平成26年度琉球大学中期計画達成プロジェクト経費（戦略的研究推進経費）研究成果報告書』
後藤雅彦 2017 「東南中国沿岸島嶼域の考古学遺跡について」『琉球大学法文学部人間科学科紀要人間科学』36
後藤雅彦 2021 「東アジア南方沿海地域の先史考古学」『地理歴史人類学論集』10
主税英徳 2021 「地域に根ざした考古学・博物館学の実践的教育」『開学70周年記念事業地域連携企画展』琉球大学
藤本強 2000 『考古学の方法 調査と分析』東京大学出版会

中文

- 張光直 1999 「“獨大計劃”與1972至1974年獨大流域考古調查」『張光直作品系列 中国考古学論文集』（初出『台湾省獨水溪與大肚溪流流域考古調查』1977年）